熊凝のためにその志を述ぶるに敬みて和する

六首

八八六番

うちひさす　宮へ上ると　たらちしや　母が手離れ　常知らぬ　国の奥かを　百重山　越えて過ぎ行き　いつしかも　都を見むと　思ひつつ　語らひ居れど　己が身し　労はしければ　玉桙の　道の隈廻に　草手折り　柴取り敷きて　床じもの　うち臥い伏して　思ひつつ　嘆き伏せらく　国にあらば　父取り見まし　家にあらば　母取り見ましし　世の中は　かくのみならし　犬じもの　道に伏してや　命過ぎなむ